**中里　忠香（なかさと・ただか）**

**１、プロフィール**

教職の傍ら、明治23年、当時地方にあっては稀有な活版印刷で郷土史を出版。東京の新聞社が全国に募集した詩で１位となったほか、県内各地の校歌作詞を数多く手掛けた。

＜生没＞

1865（慶應元）年12月　～　1940（昭和15）年１月28日

＜代表作＞

『向鶴』

＜青森との関わり＞

八戸生まれ。明治16（1883）年県師範学校（青森市）を卒業後、三八地方や青森市で教職を勤め、青森市で没す。

**２、作家解説**

郷土史研究者、作詞家、教師。

慶応元（1865）年、八戸藩権少義中里好相の次男として、八戸町（現八戸市）長横町に生まれる。幼い頃から父の私塾で学び、公立八戸小学校、同八戸中学校、明治14（1881）年県立八戸師範分校を卒業。師範分校在学中、北村礼蔵に就いて数学、漢籍などを学ぶ。青森市の県師範学校入学後は、弘前藩稽古館の学頭を務めた儒学者・黒瀧儀任(ぎとう)より漢籍と文学の指導を受け、文学的な才能を開花させた。明治16年師範学校卒業後、三戸郡育養小学校を皮切りに、三八地方の小学校や中学校などに勤務した。

明治23年、里香散士の筆名で、八戸の青霞堂より『向鶴』一巻を出版。八戸地方見聞録というべき郷土史で、当時としては地方では稀な、活版の書であった。内容は多岐にわたり、八戸藩主系譜を始めとして、その数62篇に及ぶ。

明治34年、県立第三中学校（８年後に県立青森中学校と改称、現県立青森高校の前身）開校とともに転任、国語漢文、歴史、地理、修身、寄宿舎舎監として教鞭を取った。昭和６（1931）年、同校の創立30周年記念の年に、同じ年月を勤務して退職するが、教え子たちの有志が青森市内に土地を買い、家を建ててあげたという逸話が残るように、生徒たちから慕われ尊敬された教師だった。

明治36年、東京の新聞社「万朝報」が全国に募集した「処世の歌」で、中里白香の筆名で作詞した全10連から成る作品が第１位となる。第三中学校と青森中学校の校歌、青中10周年記念祝歌の歌詞も手掛けた。また、城内小学校、川内小学校、荒川小学校、筒井小学校、県立水産学校（八戸水産高校の前身）、青森市立工芸学校（青森工業高校の前身）、下長小学校、三条小学校、私立山田高等家政女学校（現青森山田高校の前身）の校歌を作詞している。

昭和15（1940）年１月28日、青森市大字造道字浪打において逝去。

**３、資料紹介**

〇『向鶴』

図書

1890（明治23）年11月５日

190mm×130mm

八戸初の活版印刷による、郷土史。書名は八戸藩の家紋に由来し、八戸の青霞堂主人浦山汀翠の乞いを受けて、里香散士の名で著した。内容は八戸藩主系譜に始まり、土地変遷、人民移住、気候、風俗、風景、言語、経済など多岐にわたる。228頁、定価30銭。